



柏がん哲学外来の今後を考える視点

NPO法人ホップ・ステップ・ハッピー 理事長 福原 俊二郎

樋野興夫先生がよく引用される元東大総長であった南原繁先生の価値並行論は、認識上の真と、倫理上の善と、審美上の美という先験的な文化価値に加えて、政治的価値として「正義」を加えています。がん哲学外来市民学会はこの文化的価値の上に、新しく提起された「がん哲学外来」の理念を活動体として実現した組織だと、小生は思っています。

「人生の目的は金銭を得るに非ず、品性を完成するにあり」と、内村鑑三の言葉を引用する樋野先生との出会いは、2009年9月に「クアハウス佐久」で開催された第1回「佐久がん哲学外来研修会&交流会」でした。

小生は60歳定年を機に、残された人生をどのように過ごすべきかを考えていた時期で、30歳代に内村鑑三を尊敬していた集會に集っていた頃を思い出してこの活動に参画しました。集う人々は純真で、愛情が深く、何に対しても意欲的に取り組もうとする方々であったと記憶しています。今は、どうでしょうか……。

樋野先生が柏市内で、がん哲学外来面談を始められてから今年で9年目となりました。

一般社団法人がん哲学外来を経由して面談を希望された方々に対し、面談時間前後に柏がん哲学外来のスタッフが3~4名で、寄り添っています。NPO法人「ホップ・ステップ・ハッピー」は賛助会員の協力を得て、お茶菓子や資料等を用意しています。後継者を祈り求めている中で、昨年十月に柏市内で設立された花野井メディカルカフェのスタッフと本年5月8日に流山市で開催されたドキュメンタリー映画「がんと生きる言葉の処方箋」上映会に来られた方が、柏がん哲学外来のスタッフに加わって下さる事になりました。

来たる10月23日(土)には、樋野先生による柏がん哲学外来9周年記念講演会とNK細胞活性化の落語会という異色のイベントを柏地域医療連携センターにて予定しています。新たな出会いに期待を込めて……。

「カフェのレジリエンス」 まちなかメディカルカフェ in 宇都宮

栃木県立がんセンター 病理診断科・研究所 平林 かおる

樋野先生に導かれるようにして”まちなかメディカルカフェ in 宇都宮”を開設してから8年が経つ。孤独に思い悩む状況から一歩踏み出し、同じ境遇の参加者と気兼ねなく話をする数時間はがんの開放区となる。“わいわいがやがや”、お茶を飲みながらテーブルを囲んで屈託なくおしゃべりを楽しむ。病院では主治医への遠慮から聞けないこともここでは世間話のように話をする。参加者はがん患者が自分だけでないことを知り、他の参加者の体験を聞いて勇気もらい、帰る頃には心の内を吐き出し、気分もいづらか軽くなって帰路に着く。

メディカルカフェはがんによって傷ついた自我を正常に戻していく心の自然治癒力を上げる可能性があり、対話は心の傷を治す growth factor かもしれない。人と人が接触して作られる因子であるため3密が避けられないことはカフェの性質とも言える。

こうした中で新型コロナウイルスによるパンデミックが発生し、カフェは感染のリスク回避から数カ月間は休止せざるを得なかった。が、再び孤独になってしまったがん患者さんの状況を何とかしたいと昨年の5月からオンラインカフェを開催している。その後ハイブリッドカフェも取り入れたが、昨年末からの感染拡大に伴い現在はオンラインカフェに戻り開催を続けている。オンラインカフェは通常のリアルカフェと同じように個人面談、グループ対話に分けて行い、最後は共有の時間やストレッチなどのクールダウンも行っている。

オンラインカフェでは話をしている母親に子供が甘えに来たり、介護しているお年寄りが登場されたりと、各人の背景が鮮明に分かることもあった。また初めて心の内を吐き出せた方や、初めて泣くことができたと言われる方もいて、通常のカフェでは自己発露が難しかった方もオンラインの分割画面の中では各人が平等に自分の空間を保ちつつ臆することなく話ができる可能性がある。顔と顔を合わせて話をするに勝るものはないが、オンラインカフェはコロナ禍でのカフェとしてのレジリエンスなのかもしれないと思うこの頃である。